

あるいは二枚の軽石層を切るような地質構造の不連続な箇所は全く認められませんでした。また野辺地層の粘土層・砂層・腐植土層等の第四紀層の連続性をそこなうようなものも観察されませんでした。

冒頭の調査団の先生方も二度ほど現地観察されたこともつけ加えておかなければなりません。

露頭のたいへん少ない所で、ボーリングだけではわからなかった堆積相の様態をつぶさに観察できたのは個人的にも良い体験でありました。か様にさわがれなければ、企業は観察のための費用を捻出しなくて済むであろうこともまことに皮肉なものです。

活断層の対処の仕方で、6年余り前に(株)応用地質の羽田氏が「土地地質学より見た活断層の諸問題」でいみじくも論評しております。論文本旨からみると多少枝葉の部分とも思えますがお許し願って一部だけ引用させていただきます。即ち、「現

段階における活断層の問題は、土木技術者にとって設計上の数値として組み込み難い典型的なものの一つであって誠実な土木技術者にとって最も判定しにくい事象の一つであろう。このような場合土木技術者のとる方策は活断層問題を完全に無視して計画を進めるか、慎重を期していさぎよく計画を放棄するかのはいずれかにならざるを得ないことになる。したがって土木技術者にとって地質学者の活断層についての発言の内容は可能な限り、厳密で慎重であって欲しいというのが総括された願いではなかろうか」の一文につづめられております。

さて現地の51基の約1/3のタンクは水張り試験も終り、雪の下で冬を迎え、来年にはオイルインにこぎつけることになっております。そしてこの地域の開発は活断層よりももっとたいへんな経済環境の激変にほんろうされております。

(6回生 むつ小川原開発)

## エドモントン

栗原 武美子

カナダで2度目の冬を迎え、クリスマス休暇を過ごしたエドモントンのいくつかの断片をここに御紹介致します。御存知の通り、エドモントンはアルバータ州の州都で、1981年には人口53万、北緯54度とカナダの大都市の中では、最も北に位置しています。市の中心ノース・サスカチワン川岸の昔のFort Edmontonの位置には、現在州立法府の建物があります。小麦の集散地であるとともに、石油、天然ガスの産地であり、郊外では製油所や化学工業の工場などが目にとまります。1947年エドモントン近くのLeducで膨大な油田が発見されて以来、カナダ第一の石油の都市として発展し続けています。1981年アルバータ州は569億m<sup>3</sup>の石油を産出し、これはカナダ全体の生産量の84.7%を占めています。

この都市を訪ねる前、友人達より気温がマイナス30度C位になるから、暖かい衣類を用意するように忠告を受け、ミシガンでの大陸性気候を思い

出しながら出かけたところ、12月下旬の日中の最高気温は、ほとんどマイナス3度C前後で、ほんと胸を撫で下ろした次第です。今のところ、暖冬が続いているようです。但し、非常に乾燥しているため、ハンド・クリームは必需品となりました。

さて、市の中心部にあるAGTタワーより市を眺めわたすと、東の方角にはThe Clover Bar工業地域が目に入ります。このプレーリーに製油所や化学工場が立地している光景は私にとっては興味深いものでした。と申しますのも、日本では多くの場合、これらの施設が湾岸沿いに立ち並んでおり、これとはかなり対照的な光景だからです。改めてカナダとは、資源の豊かな広大な国土を持つ国だと認識致しました。尚、AGTタワーの地下はLight Rapid Transitの中央駅に通じており、LRTが市の中心部と郊外の住宅地を結んでおります。更に、中西部の交通の要地であるエドモントンは小麦の集散地でもあり、grain elevators



が鉄道沿いにある光景もこの一つの特徴です。

また、市の人口構成も雑多で、英国系の外、フランス系、ウクライナ系、ドイツ系、ポーランド系が目立ちます。これを反映し、尖塔に特徴あるウクライナ正教会堂やウクライナ・ギリシア・カトリック教会堂の建物が目につきます。この外にも、種々な人種や宗教の表われとして、回教徒のモスクやモルモン・テンプルなどが市内にはあり、因みに、この市長はモルモン教徒といった具合です。更に、市の郊外には Hutterites のコミュ

ニティがあり、彼らはキリスト教徒の一派で、自給自足・質実剛建の伝統を守って暮らしています。一例を挙げますと、服装は黒っぽい色をした質素なものが主体となっております。驚いたことにはこの Hutterites 共同体のモデルが、日本の郡山市の「イゼキ」教会を中心とする人々で実行されていることが、*Canadian Geographic* 1979年4/5月号に記載されており、思い掛け無い所で、カナダと日本が結びついている事実に感心致しました。

(院・博士課程 在カナダ)

## 落ちこぼれっこと共に

杉 木 良 子

この4、5年来、いわゆる「落ちこぼれっ子」の高校受験の為に個人指導を頼まれることが多い。何はともあれ、親子共に面接してから引き受けるか否かを決めるわけであるが、親がどんなに一生懸命でも本人にやる気のない場合は断ることにしている。親は、何とかやる気だけでも起こさせてほしいと哀願するが、そんなに簡単にやる気が起こる薬などあるう筈もない。本人の「これから一生懸命勉強して高校へ行きたい。」とか「心を入れかえて、この一年間は頑張ってみる。」とかいう台詞に弱い私は断りきれず、受験までの一年間のつき合いが始まるわけである。しかし、今まで家で机に向かう習慣も基礎学力もない子供であるから、私の指導能力から考えて定員を一名にしてあるので早くから予約を申込まれることもある。私が曲がりなりにも20年以上も教職にあるということで、地獄で仏に会ったようにほっとした顔付の母親と、身体ばかりは大きく育っても屠所の羊のように元気をなくし母親の隣にうなだれて座っている子供との何と対照的なことか。子供にとっては、まさに地獄での生活が待ち受けているわけである。

小集団の塾でもついていけないために個人指導を求めてくるわけであるから、学校の成績も当然のこと乍ら5段階評価で2か1というところ。希望教科も高校受験ともなれば英・数・国と決まっているが、私自身の都合で国語は面倒みないこと

にしている。そして残る二教科を平行してみてもいい、というのが親子共々の要望であるが、初めからそんな事をしたら虹蜂取らずになってしまうので、初めは1教科にしぼって一年生の最初からできるだけ丁寧に飽きる程の反復練習で明け暮れる。今までの乏しい経験から言えば、一般に数学より英語の方が落ちこぼれてきた期間が短い(英語は中1と中2の2年間だけであるが、数学は小4、5、6、中1、2の5年間)だけに成績を浮上させるのに時間がかからない。2だった成績が3になり(中には更に次の学期には4になる子供もいる)少しでも自信がついてくるようになると本人もやや意欲的になってきて他教科もという段取りになるのだが、もうその頃は入試も間近で実際には二教科をこなすのは至難の業である。

前述したように定員が極めて限られているので1年間もつき合ってきた子供は実際に少ないが、その前の段階である面接、あるいは相談などで多くの「落ちこぼれっ子」とその母親達に会うことができた。わが家を訪れたこれら「落ちこぼれっ子」は知能も普通、応答もきちんとできるし、運動も好き、というような極く普通の少年達であるが、驚いたことには、小学校時代から全く読書をしたことがなく、このことは彼等の国語の力が小学校の3、4年でストップしていることと併せて、英・数のおくれに大きく響いている。私は、彼等